

【自著紹介】

近代啓蒙の足跡

——東西文化交流と言語接触：『智環啓蒙』の研究

A5判 334頁 定価（4000円＋税） 関西大学出版部 2002年3月刊

関西大学東西学術研究所研究叢刊の1冊として刊行された本書は、以下の構成を有する。

序章 検証：啓蒙の時代

第1章 中国の『智環啓蒙塾課初歩』

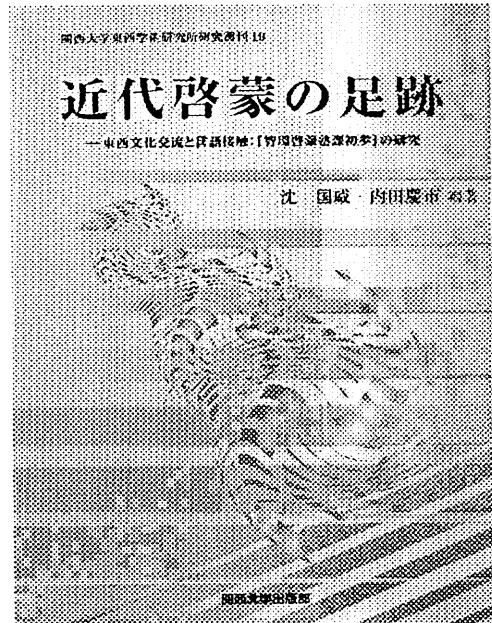
1. 中国近代史における1856年
2. 『智環啓蒙塾課初歩』の書誌
  - 2.1 1856年香港初版
  - 2.2 1864年香港改訂第2版
  - 2.3 1868年香港改訂第3版
  - 2.4 1873年上海墨海書館版
  - 2.5 1895年香港文裕堂版
3. 原著者と原書
4. 翻訳者：理雅各について
5. 英華書院について
6. 『智環啓蒙』の翻訳に当たって
7. 『智環啓蒙』の内容

第2章 『智環啓蒙塾課初歩』の訳語

1. レッグ訳語の概観
2. キーワードとその訳語
3. 分野別訳語の実態
4. 「熱帯」はどこから来たのか
  - 4.1 荒川清秀の貢献と問題点
  - 4.2 レッグまでの地理書と五帯知識
  - 4.3 知識の伝播——そのルートについて
  - 4.4 より精確な訳語を求めて
  - 4.5 『遐邇貫珍』と訳語の伝承
5. 『智環啓蒙』と19世紀の英語教科書

第3章 日本に渡る『智環啓蒙塾課初歩』

1. 『智環啓蒙塾課初歩』の舶来
2. 受容の諸相：流布と異版
  - 2.1 英語の教科書としての『智環啓蒙』
  - 2.2 啓蒙書としての『智環啓蒙』
  - 2.3 中国書との異同
  - 2.4 学校教育における『智環啓蒙』
3. 『智環啓蒙』をめぐる語彙交流



## 終章 『智環啓蒙』から見る近代への異なる道程

図版出典一覧      参考文献一覧      総画検索      語彙索引      影印本文  
あと書き

幕末・明治初期に西洋の新知識の導入に大いに活躍した柳河春三の時代の激変ぶりを記録した『横浜繁昌記』の中に、「蕃舶入津」「蕃客学語」「洋人歌曲」等の章に続き、「舶来書籍」の一章がある。全文は次の通りである。

## 舶来書籍

西洋書籍。量天測地。講武修文。百工技藝之書。舶来最夥。非洋學先生。則不能得而讀也。近今英米二國。務修漢學。在香港上海等處所刊漢字著書頗多。亦是知全世界之繁昌矣。如莫利宋林則徐所著。則不更論。新出書目。推步則談天。數學啟蒙。代數學。代微積拾級。幾何原本。格物則博物新編。重學淺說。格物窮理問答。智環啟蒙。刀圭則全體新論。内科新說。西醫略論。婦嬰新說。廣輿史乘。則瀛寰志略。地理全志。地球說略。萬國綱鑑錄。大英國志。聯邦志略。新報紀事之屬。則遐邇貫珍。六合叢談。中外新報。上海新聞等。老人多未目擊之。姑錄耳聞。以備看客參考耳。

訳：西洋の書籍は、天文地理、軍事文学、科学技術のものがもっとも多く舶来されている。洋学に精通する学者でなければ、入手して読むことができないものである。しかしながら最近、イギリスとアメリカの二国は、中国の学問を修めることに力を注ぎ、香港、上海などで中国語の書を多数出版している。これにより世界の進歩を知ることができる。例えばモリソン、林則徐の著作は言うに及ばない。新出書目では天文学、数学の書に『談天』『數學啟蒙』『代數學』『代微積拾級』『幾何原本』があり、物理学の書に『博物新編』『重學淺說』『格物窮理問答』『智環啟蒙』がある。医学書に『全體新論』『内科新說』『西醫略論』『婦嬰新說』があり、地理歴史の書に『瀛寰志略』『地理全志』『地球說略』『萬國綱鑑錄』『大英國志』『聯邦志略』がある。新聞雑誌の類に『遐邇貫珍』『六合叢談』『中外新報』『上海新聞』などがある。私は、その多くは未だ見ていないが、とりあえずご参考までに聞いたことを記録しておく。

ここで「老人多未目擊之（その多くは未だ見ていない）」とあるが、『智環啟蒙』を確実に見ていたはずである。なぜならこれを翻刻出版したのは他ならぬ柳河春三であったからである。

この『智環啟蒙』について、文明史研究家の石井研堂はその著『明治事物起原』の中で、

開国前、『智環啟蒙』が、本邦に渡り、数ヶ所にて翻刻されたれば、わが新智識啓発上に、功績鮮少ならず...

と述べている(348頁)。

中国から日本に伝来した『智環啟蒙』はどのような書物であったのだろうか(柳河春三はこれを格物、すなわち物理学の書に入れている)。

『智環啟蒙』は、中国版の正式な書名は、『智環啟蒙塾課初歩』で、1856年香港の英華書院より出版された初級の英語教科書である。イギリス人宣教師レッグ(James Legge=理雅各)が編訳している。今の文庫本より一回りぐらい大きい、55丁和綴じの小さい本であった。内容は、西洋や近代の科学に関する基本知識が中心で、小型百科全書の観がある。英華書院の英語教科

書として作られた本書は、しかしながら予想した読者層を遙かに越えたようである。『智環啓蒙』は、出版後すぐ日本に持ち込まれ、蘭学から英学に転向しようとした日本で福沢諭吉のような蘭学者をはじめ、英語を学ぶ人々に熱烈に歓迎された。原書の不足を補うため復刻版も数種類作られた。明治に入ってから『智環啓蒙』は、また日本語に翻訳され、小学校の常識、あるいは国語の教科書として採用された。このように広範囲に読まれた『智環啓蒙』は、明治人の知識形成に一役を買ったのである。

東洋史学者の中村（中山）久四郎は、「六論衍義と智環啓蒙」という論文の中で、

智環啓蒙 ……実に西洋の新智識を近世本邦人に供給したるものなり。…

此書また支那より本邦に伝わり、西洋の新智識を渴望要求したる幕末人は、勿論明治初年の人に愛読せられ、（多くの）翻刻、和解、及び翻案の諸書を刊行するに至れり。（中略）

是等の諸書、今日より見れば、実に微々たる小冊子にして、其内容も亦卑俚叢脞、少なくとも幼稚簡単なるものなれども、明治維新前後に在りては、同じく近世支那より伝来したる博物新編、格物入門等の西洋新知識本と相並びて、普通の学術的常識を養成するに与りて多大の効果ありし良書たりしなり。或点に於ては、福沢諭吉氏の学問のすゝめ世界国尽より進歩したる善本にして、明治維新前後世界的智識吸収の媒介となりしものなり。……

さはあれ智環啓蒙の如きは、畢竟耶蘇教の趣旨を加味したる一小読本たるに過ぎざるなり。然るに今之を瞻顧して茲に特筆する所以は、他にあらず。日支両国の文明伝播史上の一代代表的著述なればなり。

と指摘している。「智環啓蒙の如きは、畢竟耶蘇教の趣旨を加味したる一小読本たるに過ぎざるなり」という評は、兎も角として、近代における日中文化交流史（文明伝播史）上、「代表的著述」であるという判断には肯くことができる。このような文明史的な意味合いがあって、『明治文化全集・15思想篇』は、裏表紙などに『智環啓蒙』の異本の扉書影を付している。同書の「編集後記」では次のように述べられている。

余白の埋め草には専ら「智環啓蒙」の異本の扉を示すことにした。「智環啓蒙」並に其和訳が明治初年最も広く読まれた教科書であり、而して従来卑近な修身談以外に全く目を閉ざれし人々が之を読んで始めて世上の事々物々として研究の対象たらざるはなきを覺り、謂はば思想的に世人を幽谷より導き出して天空快濶の大野原に投げ入れた様な効果を挙げた点に於て、亦思想篇と離るべからざる関係を有すと謂ふべきである。

このように文化交流史の見地から本書は、いち早く注目されていた。

一方、近代語彙の発生という観点から本書を利用した研究に、武藤長蔵の一連の論文がある。武藤は、1918年から1年にわたって（10回）『国民経済雑誌』に「銀行」の語誌に関する論文を連載し、「銀行」という語は日本製の訳語ではなく、中国の英華辞書（1866年に刊行したロブシャイトの『英華字典』Part Iを指している）から借用した訳語である結論に達した直後（1919.3）に、長崎の古本屋で『智環啓蒙』を目にした。そして図らずも『智環啓蒙』に「銀行」という語が使用されているのを発見した。ロブシャイトの『英華辞典』より10年も早く「銀行」という語が使用されたので、氏は自分の結論を見直さなければならないことになる。武藤はさっそ

く『国民経済雑誌』に「再ビ銀行ナル名辞ノ由来ニ就テ」と題する論文を連載しはじめた。しかし論文の連載は、実質的な考察にはいる前、1920年第1号をもって打ち切られた。

『智環啓蒙』について早い時期の考察として、尾佐竹猛『維新前後に於ける立憲思想の研究』(1934)、小早川欣吾『明治法制叢考』(1945)やキリスト教布教史の研究者、小澤三郎の『幕末明治耶蘇教史研究』(1944)がある。

1968年、国語学者の古田東朔が『『智環啓蒙』と『啓蒙智慧之環』』と題する論文を発表した。

その後、漢訳洋書と日本語の近代語彙について研究を進めた佐藤亨は、著書『幕末・明治初期語彙の研究』(1986)の第2章『『智環啓蒙塾課初歩』の訳語』で、『智環啓蒙』の訳語について考察を試みた。著者は、42頁にも及ぶ第2章で『智環啓蒙』の訳語の性格、幕末、明治初期の日本語語彙との関連、英華辞書の訳語との関連を取り上げているが、資料の性格、書誌、文化的背景等に関する基本的な点で先行研究をほとんど参照せず、語彙の羅列だけに終わった感が否めない。

一方、『智環啓蒙』の出版地、中国あるいは香港では、長い間に思想史、文化交流史、英語教育史の諸分野では『智環啓蒙』を取り上げる研究がなかった。教育機関や公共の図書館に『智環啓蒙』が所蔵されていないことが原因の1つと考えられる。ただし最近になって、幾つかの研究書で『智環啓蒙』に関する簡単な言及が現れた(例えば熊月之『西学東漸與晚清社会』1994:147頁、鄒振環『晚清西方地理学在中国』2000:357頁など)。

上述した先学諸氏の研究は、多くの事実を明らかにし、さらなる研究のために堅実な基礎を作ってくれた。しかし時代や研究条件面での制約によって、中国語版の『智環啓蒙』を実際に見ることができなかつた場合が多く、英語の原書も確認していなかつた。西洋→中国→日本という近代における文化交流、言語接触の流れを追究する際、日本書だけに限定した考察は、おのずから限界が存在している。本書の著者は、インターネット時代の恩恵を浴し、広範囲に渡る資料収集から研究を始め、中国語版、英語原書の諸本を多数入手した。本書では、これらのオリジナルの資料を活用して、『智環啓蒙塾課初歩』の出版、及び日本への伝来をめぐる諸事情を明らかにした。

本書は、研究編、語彙索引、影印本文という3つの部分から成り立っている。研究編では、『智環啓蒙』に関する著者の最新の研究成果を報告している。語彙索引は、『智環啓蒙』に使用されている中国語の訳語を網羅的に採集したものであり、近代の新漢語、訳語に関する研究のための基本資料の1つとして用意した。また原書の閲覧が非常に難しい現状を考慮して、影印本文を添付した。底本は大英図書館(BL)所蔵の中国初版の『智環啓蒙』を用いている。『智環啓蒙』という書物、ないし19世紀という東洋の啓蒙時代とその諸事象の研究に興味のある読者が、本書の記述とともに語彙索引、影印本文を合わせて利用して頂ければ幸いである。